


 益田市市長
山本浩章

これまで「四神」のうち、春には東の青龍、夏には南の朱雀、秋には西の白虎を取り上げましたが、仕上げとしてこの冬は北の「玄武」について書きます。

「玄」は玄米や玄人という言葉もある通り「黒」のことです。「武」とは亀と蛇が一体となった架空の動物ですが、こちらは馴染みが薄いだけでなく、率直に言うことやグロテスクで、あまり神という印象は受けません。

ところで、四神をいるどる青、赤、白、黒の四色は古代の日本人にとっての原色でもあったと考えられます。この四色だけが下に「い」を付けると、「青い」「赤い」などそのまま形容詞になるのがその名残りです。これら以外に、黄と茶は「色」を付けることで「黄色い」「茶色い」と言いますが、これはおそらく「白い」「黒い」と同じようにごく短く「○○ろい」と言えるからでしょう。その

他の、緑、紫、紺、はたまたオレンジ、ピンク、グレーなどは、名詞を修飾しようとすれば「緑の大地」「オレンジのシャツ」など、「の」を付けるしかありません。

さて、「玄武」という言葉で私が真っ先に連想するのは、北辰一刀流の開祖である江戸後期の剣術家、千葉周作が神田於玉ヶ池（現在の東京都千代田区岩本町）に開いた「玄武館」という道場です。幕末には門弟6千人を誇り、神道無念流の練兵館、鏡新明智流の士学館とともに江戸三大道場の一つとされました。

北辰一刀流は、北辰夢想流と一刀流中西派を融合したものとされます。坂本龍馬を始め多数の志士を輩出したこの流派は、従来の剣術につきものだった神秘主義を排し、68の決まり手を明快に伝授したうえ、面、胴などの防具の装着、竹刀による打ち込み稽古という実践的な練習方法を採用していました。習得に要する期間を大幅に短縮した画期的な発想と手法は現代剣道にも通じると言われます。

北辰とは北極星を神格化した別称です。満天の星がゆつくりと円運動するなか、唯一動かない中心がこの北極星。ひとときわ澄んだ冬の夜空を仰ぎ見れば、心も身体も冴えわたるようです。

中世益田講座「益田氏と須佐」(全2回)

第2回 益田氏、須佐に遷る

【問い合わせ先】市文化財課 ☎31-0623

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いで西軍方が敗れ、総大将であった毛利氏は中国地方の西半分に及んだ領地のほとんどを取り上げられ、周防・長門(山口県)の2カ国だけを認められました。

このときの益田氏当主元祥は徳川家康から大名にするという誘いを受けましたが、これを断って毛利氏に従い、益田を離れる決断をしました。さらに、長州藩初期の深刻な財政問題を解決しました。これらの功績により、益田氏は代々家老を務める永代家老家の待遇を受けます。

そのような元祥に毛利氏から与えられたのが須佐でした。このときの須佐は、江崎、津浦も含む大きな村でした。また、日本海に突き出てそびえる高山は、標高532mを誇り、日本海を往来する船の目印であり、中腹の宝泉寺および黄帝社には航海安全を願う人々から多くの船絵馬が奉納され、現存する49点が「須佐宝泉寺・黄帝社奉納船絵馬」として重要有形民俗文化財に指定されているように、信仰の対象でした。

このように、須佐は日本海交易における重要な港町であり、毛利氏は益田元祥の貢献に対して、待遇

だけではなく、領地でも報いたのでした。

須佐が与えられたのには伏線があります。慶長4年に益田氏領の領地替えが検討された際、元祥は領地替え先の希望を毛利氏に伝えています。第1希望は石見国那賀郡(浜田市・江津市)、第2希望は長門国阿武郡、第3希望は石見国吉賀郡(鹿足郡)または山代(岩国市北部)、第4希望は周防国都濃郡(周南市)でした。その理由は近いところであれば多くの家臣を連れて行けるからというものでした。元祥の希望は最大限かなえられたと言えます。

以後、江戸時代を通じて益田氏は須佐を治め続け、中世以来の多種多様な文化財を現代に伝えました。



萩市須佐の益田家墓所。益田元祥以来の益田家歴代の墓が並ぶ。